

## Blending 「混淆」の言語現象と思想史的な背景に関する考察

後 藤 弘 樹

混淆による造語（或いは混成語ともいう）についていえば、新しく言葉をあみだす言語形成過程やその歴史的流れには色々な要素が複雑に絡み合い、混じりあっていつしかそれ自体が一つの生命を持ち、一見ただけで或いはちょっと耳にただけで、それ自身が持つ固有の姿や名称と理解出来て、やがて時間の経過と共に、一つの主義主張を公にする固体にまでになる。そうして新しく出来た造語が長く何時までも生きながらえられるか、はたまた短命に終わるか否かは、一つにはどれだけ広く社会的に容認され、人々に受け入れられる言葉になれるかどうかにかかっている。今回本稿では、人間が営む社会という枠組みの中で、言語学上言葉の誕生の仕組みと成り立ちの一端を混淆（Blending, 或いはContamination）に介在する言語現象と思想史的（心理的）な背景を考察することにする。

### はじめに

本稿を進めるにあたって、まず最初に“Blending”「混淆」に対する英米の代表的な辞書の定義・説明・取り組み方及びその姿勢から論を進めていくことにする。まず最初に、話の筋道として、辞書界の帝王ともいわれ、多くの辞書編纂者に底知れぬ絶大な影響を及ぼしたイギリスが誇る全20巻からなる大辞書、*OED* (*Oxford English Dictionary on Historical Principles*) から話を始めることにする。研究社の市川三喜編『英語学事典』、645ページに、「この事典は、イギリスの国民的大編纂事業ともいべき広く全国千数百人にのぼる一般篤志閲覧者達の協力を得て、彼等から提供された約600万にもおよぶ膨大な資料に加え、70数年の歳月をかけて歴史的原理に基づいて完成した類のない偉大な辞書である」と記述されている。更に研究社の大塚高信・中島文雄監修の『新英語学辞典』、375ページによれば、「総ページ数1万5,488、収録語数約42万5,000、用例約180万、引用作家数約5,000、1150年以後の語は全て収録し、また16世紀以前は当時入手可能な全作家の作品から用例を蒐集したという。語形・語義についても、11世紀以後世紀ごとに語形の変異形を挙げ、語義もおおむね歴史的順序に分類し、各語義について初出例を、また廃語については最後の例を挙げ、その間少なくとも100年に1例の割合で各時代の用例を与えている。」と詳細に記述されている。こ

の *OED* は、科学的言語学の観点から、厳密に言葉の歴史的原理に基づいて編纂された名実ともに世界最大最良の、イギリスが誇る最も権威のある、従って、全ての英語研究者にとって、永遠の言語の Bible とも目される *OED* は、かつては *NED* (*A New English Dictionary on Historical Principles*, 1884-1928) ともいわれたが、1928年に全10巻、1933年に Supplement 1巻、1986年に新補遺全4巻完成、そうして1989年には第二版、全20巻が刊行された。その初版からの足跡を“Blending”の項目を通して辿ると、初版では、“The process of mixing intimately; the resulting state; a harmonious mixture”とこの語の取り扱いについてはいたって簡単で素っ気無いが、1989年に刊行された全20巻からなる第二版では、いち早くこれまでの言語研究の著しい成果を巧みに取り入れて、“Blending”の命名者であるイギリスの言語学者・音声学学者である Henry Sweet (1860-1943) の *New English Grammar* やデンマークの言語学者である Otto Jespersen (1860-1943) の *Progress in Language* などからの説明を引用して言語学的に踏み込んだ取り扱いをしている。やはり、さすがは世界に冠たる世界最高、最良、最大のイギリスが最も誇る大辞書だけに、語彙や語義の取り扱いと説明及びその取り組み姿勢には全く手抜かりはなく、燦然たる輝きを誇っていて、ただただ敬服あるのみである。

そこで、本稿では論を進めていく上での出発点として、非常に重要であると判断して、下記に“Blending”に対する説明を *OED* の第二版から引用しておく。

Grammatical and logical anomalies often arise through the blending of two different constructions. Thus in colloquial English the two constructions *these things* and *this kind of things* have resulted in the blending *these kind of things*. So also the plural themselves may be regarded as a blending of *himself* and *ourselves*.

— Henry Sweet, *New English Grammar*, Part 1, p. 48, 1892.

Contaminations or blendings of two constructions between when the speaker is wavering occur in all languages . . . The blending was due to the fact that what was grammatically the object of one verb was logically the subject of another verb.

— Otto Jespersen, *Progress of Language*, vii. 188, 1894.

Blending can be considered relevant to word-formation only insofar as it is an intentional process of word-coinage. We shall use the term here to designate the method of merging parts of words into one new word, as when *sm/oke* and *f/og* derive *smog*.

— H. Marchand, *Categories Present-day English Word-Formation*, x. 367, 1960.

オックスフォード系の一群の辞書のうち、まさに *OED* はそれらの辞書の最高峰に君臨す

る、いわば、世のアルピニスト達の永遠の憧れの的、常日頃しばしば畏敬の念を持って仰ぎ見る世界最高峰の山、エヴェレストにも似たような崇高で神々しい存在であるということが出来る。この *OED* の編纂過程の副産物として誕生したのが *POD* (*The Pocket Oxford Dictionary of Current English*), *COD* (*The Concise Oxford Dictionary of Current English*), *SOD* (*The Shorter Oxford English Dictionary on Historical Principles*) で、これらの辞書は例えていうならば、さしずめ *OED* の血を分けた三兄弟のような存在である。しかし、*POD* や筆者が長年愛用している、コンパクトで要領を得た説明で定評のある *COD* (1951年版の第四版)、更には、*SOD* には残念ながらこの語は見出し語にも加えられていない。思うに、恐らくこのサイズの辞書ではページ数や語彙数の上限からといって採択されなかったのではなかろうかと推察される。更には、Henry Cecil Kennedy Wyld (1870-1945) の *The Universal Dictionary of the English Language* では、“Process of mixing different types of the same articles (esp. tea, spirits &) so as to produce a marketable, and if possible an agreeable, combination.” と、まだこの年代の段階では“Blending”に対する言語学的な記述にいたる説明や解説には一切触れていない。従って、今日からすれば、どう見ても決して十分な語義記載であるとは言えない。

これに対して、百科事典的な編修で有名なアメリカの代表的な大辞典である *Webster's the Second* は、“(a) the act of one that blends; (b) a product resulting from blending” と説明し、更に大改定された *Webster's the Third* では“a product resulting from blending” と全くかわりばえせず、第二版の *OED* の改定版に比べて実にそっけない不親切ともとれる取り扱いで、その上、言語学的な記述の説明も皆無なものには驚かされる。少なくとも言語学の見地からすれば、“Blending” という語彙の見出し語の定義・説明には残念を通り越して遺憾の極みであるとしかしいようがない。*New Standard Dictionary of the English Dictionary* ではわずかに3の項目に“The act or process of one that blends” と表記しているのみである。また *Webster's New Twentieth Century Dictionary* は“the act of intermixing or shading, as of colors in painting” と、残念ながら筆者が求める言語学的な正確な語義の定義・説明には程遠く、期待に反していて、全く不十分としかしいようがない。更には、*The New Century Dictionary of the English Language*, や *The Random House Dictionary of the English Language* 及び *The Random House Webster's Unabridged, Second Edition* にいたっては見出し語にさえこの語の語彙すら記載されていないのには一体どうしたことか、総じて、アメリカの辞書は見たとおりにずれも大同小異で、これまでの言語学的な研究の成果が少しも反映されておらず、旧態依然として全く変化がないのには驚くほかはない。従って、第二版から第三版への大幅な大改定にも拘らず、少なくともアメリカ系の辞書では、特に“Blending” に関して目をみはるような改定の成果が付け加えられていないのには失望すら

覚える。このようなアメリカ系辞書の不親切，不行き届き，配慮のなさとする思いとなるような語義の説明の取り扱い方は実に遺憾に思う。いや全く残念というほかはない。しかし，だからといって，ウェブスター大辞書の評価や価値を下げるものでは決してないことを一言断っておきたい。名だたる権威ある大辞書のこと，“Blending”に関する進んだ言語学的な意味・用法を採録しなかったのにはそれなりに何らかの理由や根拠があつてのことであろうと思われる。従つて，筆者如き浅学非才の未熟者の一学徒が，いっばしの専門家気取りで，いやしくも権威ある大辞書にたいして，だいそれた無鉄砲な，生意気な，辛らつな批判めいたともとれる事をつい口走ってしまったが，どうか言い過ぎた身勝手な，不穏当な言辞には何卒平にご容赦願いたい。ウェブスター大辞書の愛用者の一人として，今回の第四版の改定では，新しい研究成果に裏打ちされた言語学的・記述的な説明が前面に出た，これぞウェブスターといえるような大辞書の出現を期待し，待ち望まれるところである。

次にわが国の各種大辞典に記載されている研究成果の表記の仕方に目を移してみると，新村出編の『広辞苑』第六版には，「意味・形の似ている単語や句が部分的に組み合わさつて新しい言い方を作る」と説明して，「やぶる」と「さく」とから「やぶく」が作られるの類と述べている。また松村明編の『大辞林』第二版では，「意味・形態の似た二つの語・句又は文が混ぜ合わされて，新しい語・句や文が出来ること」と述べ，「便利だ」と「都合がいい」ことから「便利がいい」が出来る類と説明している。更に『日本国語大辞典』第二版，1183ページによると，混淆とは，「意味の似ている二つの単語や句，時には話の筋が互いに部分的に組み合わさつて新しい一つの語句，または話の筋を形成する」ことと定義して，例として，「とらえる」と，「つかまえる」とから「とらまえる」が成立するなどの類と説明している。また市川三喜編の昭和三十年に発行された研究社『英語学辞典』，145ページには，「二個の類似した語句・構文を意識的または無意識的に混淆することによって，新しい語句・構文を生ずる文法上・理論上の変態をいう。」といずれも言語学的見地からほぼ似通つた説明をしている。

注目すべきは大塚高信氏の説である。氏が更に一歩進んで，よりの確に『英文法論考』，214ページにおいて述べておられる記述である。氏は，混淆（Blending）とは，「二個の語がその一部分を持ち寄つて，両語の意味を含んだ新語を作ることである。」と述べている。英語だけではなく，日本語にもその例が見られる。時代の趨勢を反映して，近年，科学技術のめざましい進歩・発達に伴い，特に最近では，IT（Information Technology）関係を含むコンピューター関連専門用語の中に混成語で出来たとおぼしき用語が沢山見られるようになっている。例えば，パソコン（< personal + computer），スパコン（< super + computer），マイコン（< micro + computer），ワープロ（< word + processor），等等挙げれば枚挙にいとまがない。またラジカセ（< radio + cassette; cassette player）や，そのほかにも身

近に色々あるが、特に、今も強く印象に残っているのは、かつて日本で一世を風靡して一時期よく使われて流行語ともなった、「モチコウス」(<もちろん+ of course)などの言い方は、日本語の意味とその英語とがうまくかみ合って混淆し、合体して出来上がったいわば典型的な混成語の一つである。そこで、本稿では英語の“Blending”に的を絞って論考する場合、意識的あるいは無意識的にしろ、人間のごく自然な発想からでてくる言語現象として、心理的動機から醸成される言動とあいまって、日常人間が発する発話の中で、言語学的にも当然のことながら、単に語彙そのものばかりでなく、シンタクス(統語法)の面でも検討対象として取り上げるのが普通、常道であろうと思われる。そこで筆者なりに以下に本稿で取り上げた混淆で醸成されて出来上がった語彙と Syntax に関わる心理的、思想的な言語現象を取り上げることにする。

## 1. 語彙に於ける混淆の概要

### 1-1 混淆に於ける造語形成様式の諸相

語彙の面では、背景となる対象には2つの言葉(語、語彙)が互いに交じり合っ一つの表現形態となる場合と、既にあった言葉に新たな要素が加味されて出来上がる過程で、本稿でいう“Blending”が発生する。

ここで混淆に於ける造語形成要因として深くかかわっている事例を語形成の成り立ち方法から整理・分類して、そのパタンを挙げると、

#### (1) 二個の語のそれぞれの語頭による結合方式

デジカメ	(< <i>digital</i> + <i>camera</i> )	「デジタルカメラ」
ファミコン	(< <i>family</i> + <i>computer</i> )	「テレビゲーム用のコンピュータの商標名」
マイコン	(< <i>micro</i> + <i>computer</i> )	1971
パソコン	(< <i>personal</i> + <i>computer</i> )	1971
ラジカセ	(< <i>radio</i> + <i>cassette</i> ; cassette player)	「ラジオ付きカセットプレイヤー」
ラジコン	(< <i>radio</i> + <i>control</i> )	「無線操縦」
ワープロ	(< <i>word</i> + <i>processor</i> )	「文書作成編集機」1970

等等挙げれば枚挙にいとまがない。ご存じの通り、以上はいずれも決して珍奇なものではなくて、極極きわめて日常我々の生活と身近な事例である。

ところで、テレビを見ていると、コマーシャルの中に混淆とおぼしき新奇な造語に遭遇することがよくある。造語形成としての善し悪しは別にして、混淆が我々の日常生活に深く関わり、如何に幅広く浸透して、活発にいと簡単に作られている。その結果、新しい言葉が

次々と誕生している様は身近によく散見される場所である。例を挙げると平成25年11月12日放映の開局50周年特別企画「開運！なんでも鑑定団」で、コマーシャルの中で、ハイボールとカラアゲから「ハイカラ」、又翌日の11月13日のテレビ朝日「下町の味、限定グルメ」の番組では、モチとチーズが入ったお好み焼きを「モチーズ」といった類の例である。更に極めつけは、平成25年12月8日のNHKの昼のニュースで放映された、陶器で有名な栃木県益子町での自転車で巡る陶器市の催しのことをポタリング (< potter + cycling) と称していたのは、けだし圧巻で、実に見事な混成語だといえる。正に勇猛果敢な造語作成意欲の旺盛さにはしばし驚嘆するほかはない。

(2) 2個の語の結合

electrography	(< <i>electro</i> + <i>graphy</i> )	「写真電送術」1840
hypogenesis	(< <i>hypo</i> + <i>genesis</i> )	「発育不全」
hypokinesis	(< <i>hypo</i> + <i>kinesis</i> )	「運動低下」1896
taxonomy	(< <i>tax</i> + <i>ology</i> )	「分類法 (学)」1986
opalescent	(< <i>opal</i> + <i>escencet</i> )	「オパールのような乳白光を出す」1813

(3) 最初の語の語頭の部分と2番目の語の最後の部分との結合

もちコウス (< もちろん + of course)

かって日本で一世を風靡して一時期よく使われて流行語ともなった。日本語の意味と英語とがうまくかみあって混淆，合体して出来上がった，いわば珍しい混成語の一つであり，いまだに強く印象にのこっている。

gerrymander	(< <i>gerry</i> + <i>salamander</i> )	「自党に有利になるように選挙区を勝手に変える」1812
urinalysis	(< <i>urine</i> + <i>analysis</i> )	「尿検査」1889
trainasium	(< <i>training</i> + <i>gymnasium</i> )	「訓練場」
stagflation	(< <i>stagnation</i> + <i>inflation</i> )	「景気停滞下の物価高 (インフレーション)」
transistor	(< <i>transfer</i> + <i>resistor</i> )	「トランジスター」1948
motel	(< <i>motor</i> + <i>hotel</i> )	「街道沿いにある自動車旅行者用宿泊所」 1925, 但し, 三省堂の大塚高信編の『新英文法辞典』, 784ページには年代が1948となっている。



## (4) 最初の語と2番目の語の語尾の部分の結合

expressway	( < <i>express</i> + <i>highway</i> )	「高速道路」1944
radionics	( < <i>radio</i> + <i>electronics</i> )	「電子工学」1943
telecast	( < <i>tele</i> + <i>broadcast</i> )	「テレビ番組, テレビ放送」1937
travelator	( < <i>travel</i> + <i>escalator</i> )	「動く歩道」1955

## (5) 最初の語と2番目の語の語頭の部分の結合

fathercom	( < <i>father</i> + <i>complex</i> )	「親父複合; 和製英語で, 正式な英語では <i>electra complex</i> という」1913
mothercom	( < <i>mother</i> + <i>complex</i> )	「新母複合; 和製英語で, 正式な英語では <i>oedipus complex</i> という」1910
telecine	( < <i>tele</i> + <i>cinematography</i> )	「録画番組, テレビ映画」1935
telephoto	( < <i>tele</i> + <i>photographic</i> )	「写真電送」1881

## (6) 最初の語の語頭の部分と2番目の語との結合

airbus	( < <i>airplane</i> + <i>bus</i> )	「近・中距離の広胴型ジェット旅客機」 1945
alcoholiday	( < <i>alcohol</i> + <i>holiday</i> )	「お酒を飲んですごす休日」
alcopop	( < <i>alcoholic</i> + <i>pop</i> )	「アルコポップ, アルコール含有の発泡性飲料」1955

## (7) 比喩的に作られた事例

この他, 比喩的な意味を醸し出す方法で語の混淆が行われる場合がある。Norman W. Schur は *English English*, p. 191 で, 混成語の中には, 音響的な響きと意味とを結びつけて比喩的な意味を醸し出す方法で作られる造語もあると述べている。

The figurative meaning is that of a made-up word combining the sounds and meanings of parts of two other words, like *squarson*, combination of *squire* and *parson*; *mingy*, combination of *mean* and *stindy*, *smog*, combination of *smoke* and *fog*, etc.

と例を挙げて簡潔に説明している。

## (8) ふざけて, こじつけて作られた事例

しかし混成語の中には, Robert Burchfield, *The English Language*, p. 44 によれば, 同じような音を有する語をふざけて, こじつけて出来た造語もあるそうである。例えば,

Closely related are humorous perversions of similarly sounding words, for example *screwmatics* 「リユーマチ」 1895 after rheumatics ([注] 顔をしかめるほどの痛さからリユーマチをもじって) and *slimnatics* 1970 「美容体操」 (after gymnastics).

— Robert Burchfield, *The English Language*.

この混成語について、“portmanteau” 「かばん語」なる用語を造りだした Lewis Carol, 本名, Charles Lutwidge Dodgson (1832-98) は,

Well, ‘slithy’ means ‘lithe and slimy.’ ‘Lithe’ is the same as ‘active.’ You see it’s like a portmanteau — there are two meanings packed up into one word.

— Lewis Carrol, *Through the Looking-Glass*.

「それはかばんのようなものなのです——二つの意味が一つの言葉の中に詰め込まれているのです。」

と述べている。この場合、その思想的、心理的背景にあるものは、人の気持ちを引く目新しさ、新鮮さ、力強さ、それに何よりも一見しただけで、或いは、ちょっと耳にただけでそれとわかる魅力的な語の響きと品格を持った要素を一面に兼ねそなえた表現上の効果をねらった点にある。例えば、商品などに名称を付ける際、将来ヒットするような、行く行くは一流銘柄となれる可能性のあるような風格を備えた商標を商品名として登録したいと無意識的に願うものである。名前のあり方次第でその商品の売れ行きにも大なり小なり影響する場合が多いからである。特に製造品などの商品に名称をつける場合はことさらかかせない大切な要素となる。この要素や基準にぴったり適合しうるか否かは別にしても混淆という言葉上しばしば見られる言語現象が言葉の造語形成過程で起こり、これにより日常数多くの造語(混成語)がさまざまな分野で誕生している。

しかし、結論として、音韻の面からいうと、一般に基本的な造語の形成方法は、Stuart Robertson revised by Frederic G. Cassidy の *The Development of Modern English*, p. 213 によれば、

The first sounds of one word are usually blended with the last sounds of another, when the two have some element of sound in common, though it be no more than a single vowel or consonant. Everyone has unintentionally telescoped words in this way, and it is exceedingly likely that the vocabulary has been enriched, to an extent far greater than is usually recognized, by words created through this process.

また、George Harley McKnight も *English Words and Their Background*, p. 165 に簡潔に



語の混濁のことを次のように述べている。

Closely related to words of this kind are a number of new creations which aptly express certain shades of meaning and which have been appropriately named 'blends.' In words of this type, as the name applied to them indicates, two words have been fused, only a part of each remaining, and the meaning, as well as the resulting form, is a blend of that in the two component words.

ここで纏めとして、混濁によって出来た、既に記述した以外の混成語の例を一括して、少し下に挙げておく。最初に、Lewis Carrollが*Through the Looking-Glass*の中で使っている彼のいう、所謂この“portmanteau word”「かばん語」に加えて、今日比較的によく知られているいわば日常語となっている造語の例を含め、いくつか挙げておく。尚、造語（混成語）の出来た（使われだした）正確な時期を示す年代が、残念ながら突き止められず、不詳としたものも若干あるが、概ね（ ）内の造語の起源を示す年代は、主としてOEDや研究社『英和大辞典』第六版の表示を参考にしたものであるが、なかには～頃的なものもあって、それには？をつけている。

“Amerindian”	( < American + Indian )	「アメリカ先住民」(1898)
“AfroAmerican”	( < African + American )	「アフリカ系アメリカ黒人」(1853) 但し 1980年代後半頃から“African-American”の方が好んで用いられている。
“agribusiness”	( < agriculture + business )	「農事産業」(1955)
“airmada”	( < airplane + armada )	「飛行編隊」不詳
“Amerenglish”	( < American + English )	「アメリカ英語」— I. M. Ball, <i>Encounter</i> , Oct. (1974)
“autocross”	( < auto + crosscountry )	「自動車のクロスカントリーレース」 (1963)
“autonetics”	( < auto + cybernetics )	「自動制御論」不詳
“Band-aid”	( < Bandage + aid )	「ガーゼつきの救急絆創膏」(1924)
“blitzflu”	( < blitzkrieg + influenza )	「電撃的にやってくる流行感冒」不詳
“blurt”	( < blow or blare + spurt )	「出し抜けに言い出す」(1573)
“bomphlet”	( < bomb + pamphlet )	「宣伝用のちらし」不詳
“boost”	( < boom + hoist )	「後押し、押し上げる」(1815)
“brunch”	( < breakfast + lunch )	「朝食兼昼食」(1896)

“cablegram”	(< cable + telegram)	「海底電信」(1868)
“Calavo”	(California + avocado)	「カリフォルニア産のアボカド」不詳
“calpis”	(calcium + sarpris)	「カルピス、乳酸菌飲料のひとつの商標名」(1920?)
“campership”	(camper + scholarship)	「キャンプ補助金」不詳
“chlorodyne”	(chloroform + anodyne)	「(商標) 薬品名、麻酔鎮痛薬」(1863)
“chump”	(< chop + lump)	「短い大きな木の塊」(1703)
“chortle”	(< chuckle + snort)	「声高く笑う、Lewis Carroll の造語」(1872)
“chunnel”	(< channel + tunnel)	「海底トンネル」(1928)
“cinecism”	(< cinema + criticism)	「映画評」不詳
“cinemactress”	(< cinema + actress)	「映画女優」不詳
“cinemaddict”	(< cinema + addict)	「映画ファン」不詳
“cinematize”	(< cinema + dramatize)	「映画化する」(1916)
“cinemese”	(< cinema + ese)	「映画用語」不詳
“cinerama”	(< cinema + panorama)	「(商標) シネラマ (大型映画の一方式)」(1951)
“citrange”	(< citro + orange)	「シトレンジ」(1904)
“computeracy”	(< compu + literate)	「コンピューターを使いこなせる」(1981)
“crouch”	(< cringe + couch)	「うずくまる、かがむ」(<1395)
“Dakoming”	(< Dakota + Wyoming)	「両州の州境にある町名」不詳
“dang”	(< damn + hang)	「ののしる」(1793-97)

上野景福『英語語彙の研究』, 158ページによれば, 化学薬品はその構成要素からいって混成語が従来から存在していたとのことである。その最たるものの一つは頭文字語として,

“DDT”	(dichloro + diphenyl + trichloroethane)	「殺虫剤の一つ」(1943)
“doggerly”	(< dog + groggery)	「下等な酒場」(1611)
“dumbfound”	(< dumb + confound)	「唖然とする」(1653)
“electrocute”	(< electro + execute)	「電気死刑にする」(1889)
“Eurafrican”	(< Europe + African)	「ヨーロッパ人とアフリカ人の血がはいたハーフ」(1890)

“Eurailpass”	( < Europe + railroad pass )	「ヨーロッパ鉄道割引券」 不詳
“Eurasia”	( < Europe + Asia )	「ヨーロッパとアジアを併 合した名称」(1844)
“flaunt”	( < flout + vaunt )	「みせびらかし, 誇示」 (1566)
“flurry”	( < fly or flaw + hurry )	「騒動, 混乱, 動揺」 (1866)
“flush”	( < flash + blush )	「紅潮, (顔の) 赤らみ」 (1375)
“foist”	( < fist + hoist )	「偽物などをつかませる, おしつける」(1545)
“galumph”	( < gallop + triumph )	「意気揚々と歩く, Lewis Carroll の造語」(1872)
“gerrymander”	( < Elbridge Gerry + salamander )	「自党に有利な選挙区改定」 (1812)
“giropilot”	( < autogiro + pilot )	「オートジャイロ (水平回 転翼を取り付けた航空機 の操縦士) 不詳
“glumble”	( < growl + rumble )	「不平, 苦情」(1586)
“guesstimate”	( < guess + estimate )	「当てずっぽうに見積もる」 (923)
“heliport”	( < helicopter + airport )	「ヘリポート, ヘリコプタ ー発着場」(1948)
“hokum”	( < hocuspocus + bunkum )	「でたらめ, ばか話」(1917) 尾上正次『現代米語文 法』, 5 ページより (1917)
“humanzee”	( < human + chimpanzee )	「人間そくりのチンパンジ ー」不詳
“hydramatic”	( < hydro + automatic )	「(商標) 自動変速機」不詳
“hydroplane”	( < hydro + aeroplane )	「水上飛行機, 水平舵」 (1901)

“inspectoscope”	( < inspect + fluoroscope )	「(商標) 透視鏡」不詳
“interphone”	( < inter + telephone )	「内線, インターホン」 (1942)
“Interpol”	( < international + police )	「国際刑事警察機構の通称」 (1952)
“Janglish”	( < Japan + English )	「日本人英語」不詳
“Kanorado”	( < Kansas + Colorado )	「両州の境界線に近い町名」 不詳
“lambast”	( < lam + baste )	「激しく非難する」(1637)
“lunch”	( < lump + hunch or bunch )	「昼食」(1580)
“luncheon”	( < lunch + nuncheon )	「昼食, 昼食会」(1580)
“medicare”	( < medical + care )	「医療保障制度」(1955)
“mimsy”	( < miserable + flimsy )	「みすぼらしい, Lewis Carroll の造語」(1872)
“motel”	( < motorists + hotel )	「自動車旅行者用の宿泊所」 (1925)
“motorcade”	( < motor-car + cavalcade )	「自動車行列」(1913)
“Nabisco”	( < National + Biscuit + Company )	「アメリカの大手製菓会社」 不詳

一見した所, “Nabisco” は頭文字語のように見えるが, 上野景福『英語語彙の研究』, 159ページによれば, 決して頭文字語ではないという。これもれっきとした混成語だということであるので, 無事にお墨付きを得たお陰でここに市民権を付与され, 付け加えておくことにする。

“newscast”	( < news + broadcast )	「ニュース放送」(1937)
“newsman”	( < news + paperman )	「新聞記者」(1596)
“octopus”	( < octopus + push )	「一種の水中ホッケー競技」 (1970)
“Oxbridge”	( < Oxford + Cambridge )	「Oxford 大学及び Cambridge 大学」(1849)
“parambrella”	( < parasol + umbrella )	「晴雨兼用パラソル」不詳
“paratrooper”	( < parachute + trooper )	「落下傘部隊兵」(1941)

“Philico”	(< Philips + Company)	「オランダに本拠を置く大手電気・電子機器メーカー」不詳
“photogenic”	(< photography + genic)	「写真うつりのよい」(1839)
“plumcot”	(< plum + apricot)	「スモモをかけあわせたアンズ」不詳
“pressocracy”	(< press + autocracy)	「新聞王国」不詳
“psychography”	(< psychology + telegraphy)	「自動式性格判定器」(1850)
“radiocast”	(< radio + broadcast)	「放送する」(1931)
“rurban”	(< rural + urban)	「田園都市の」(1918)
“savagerous”	(< savage + dangeropus)	「凶悪な」(1832)
“scribbledehobble”	(< scribble + hobbledehoy)	「乱雑記帳, James Joyce の造語」(1922)
“scurry”	(< skirr or scour + hurry)	「大急ぎ, にわか雨」(1580)
“slanguage”	(< slang + language)	「俗語的言葉」(1842)
“slender”	(< slim + tender)	「ほっそりした, すりとした」(1548)
“slide”	(< slop + glide)	「滑走, 滑落」(1644)
“slimsy”	(< slim + flimsy)	「もろい」(1845)
“slithy”	(< slim + flimsy)	「ねっとり柔らかい, Lewis Carroll の造語」(1879)
“smaze”	(< smoke + haze)	「煙霞」(1953)
“smog”	(< smoke + fog)	「煙霞, スモグ」(1905)
“snark”	(< snake + shark)	「得たいの知れぬ怪獣, Lewis Carroll の造語」(1879)
“socialite”	(< social + ite)	「社交界の名士」(1928)
“splatter”	(< splash + spatter)	「はね, はねたもの, 少数, 少量」(1784-85)
“squash”	(< squeeze + crash)	「込み合い, 押し合い」(1325)
“squawk”	(< squall + squeak)	「カモメなどの鳴き声」(1821)
“squirm”	(< squir + swarm or worm)	「もがく, もがき」(1691)
“stagflation”	(< stagnation + inflation)	「景気停滞下の物価高」(1965)
“telecast”	(< travel + escalator)	「テレビ放送, テレビ番組」(1937)

“telegenic”	(< television + genic)	「テレヴィ放送に適した」 (1939)
“telephoto”	(< television + photograph)	「電送写真」(1895)
“teleprinter”	(< telegraph + printer)	「タイプ式電信機」(1904)
“televisioners”	(< television + viewers)	「テレヴィジョン視聴者」 (1935)
“travelator”	(< travel + escalator)	「動く歩道」(1955)
“travelogue”	(< travel + dialogue)	「スライド映画などを使用する 旅行談」(1903)
“twirl”	(< twist + whirl)	「渦巻き, 旋風」(1598)
“urinalysis”	(< urine + analysis)	「尿分析, 尿検査」(1889)
“Vegeburger”	(< vegetable + burger)	「肉を使わずに野菜と大豆で作 ったパテをはさんだサンドイ ッチの商品名」(1972)
“warohan”	(< war + orphan)	「戦災孤児」不詳

上記の造語(混成語)の内容をよく精査すると、主として、地名、人名、商品名などの固有名詞に“Blending”で作られたものが沢山あることがよくわかる。このように、2つの語が混じりあって出来上がった混成語は、新語形成過程でよく生じるばかりでなく、また文章の構造上にもしばしば見られる言語現象である。混成語の多くは人を引き付ける表現上の効果や目新しさ、物珍しさをねらって意識的に作られたもので、口語・俗語、特にジャーナリズム用語に多く見られると、倍風館の『英文法辞典』、98ページに述べられているが、敢えてもう一つここに付け加えるとすれば、それは時折新聞や雑誌などに掲載される広告欄にあっと驚くような造語や表現形態をとって、心理的に人の心を動かし、その気にさせて、商魂たくましく購買意欲をたきつけるような衝撃的な宣伝文句や街中の目抜き通りなどの人目を引く奇抜な看板英語などにもよく見られるように思う。

また、大塚高信氏は、『英文法論考』、215-216ページに更に具体的に、言語現象の思想的、心理的背景にあるものを論じて、「Blendingとは、吾々が或ることを言わんとするとき二つの文法上異なった形式が同時に吾々の心に浮かんでその各々の一部が混合して論理上成立しない形式となったものである……吾々の言語は到底迅速な思想に追従することは出来ない。強烈な感情を満足に盛ることは出来ない。そこに非文法的構造が生ずるのである。……又書く場合でも、特に感情がはげしかったり、新しいideaが矢継ぎ早に想起して来るときには、つい吾を忘れてこの罪を犯すのである。」と詳しく述べられている。いやまったくそのとお



りである。従って、“Blending”は言語が発達する上で科学の急速な発達や、時代的、社会的、文化的な背景や必要性に後押しされて新語が次々と造語されて、それ自体、人や世間をあっと言わせるような効果をねらって世に送り出すもので、それなりに市民の日常生活の中で大きな役割を果たしている、いや、これまでも果たしてきたし、これからも変わりはないであろう。こうして造られた造語の中には、新鮮味や、親しみ感から庶民の間にしっかりと根づき、社会的なステイタスを得て、一層堅固なものとなり、時代を超えて長く愛されるものがあり、現在も日々勢力的に、活発に語の混淆が行われている。

## 2. 統語法 (Syntax)

統語法では筆者が英米の文学作品から蒐集した使用例を引用して、実証的に論じることにする。

### 2-1 can't help + 原型不定詞

can't help~ing と can't but do 「~せざるを得ない、思わず~してしまう」の混淆。これには “can't help~; can't help but~; can't but help~” の三とおりの表現パターンがある。

“can't help~ing” や “can't but do” の方が文法上は正式な構文であるが、この語形はその両者の語形の混淆によって生まれたと見られる用法で、一般に正用法として今日広く容認されている。従って、この語形には “can't help do, can't help but do” の両方の語形が見られる。しかし、Porter G. Perrin も *Writer' Guide and Index to English*, p. 519 に、“There are three possible idioms” といっているように三とおりの言い方があり、三番目の言い方は多くの作家は避けているが、これもれっきとした “established idiom” だと述べている。また Margaret M. Bryant は *Current American Usage*, p. 49 に、Summary として、“Can't (cannot) help but plus the infinitive is standard English. It occurs in spoken and written English. Usage is divided between this construction and cannot help plus the general, with the latter occurring more frequently in formal written English.” と述べている。しかしながら、Wilson Follett は、*Modern American Usage*, pp. 167-168 にこの語法は、“a grammarless mixturer” 「文法を無視した混用」ときめつけ、また学者の中には help のあとに but を用いてはならぬと強く非難する者もいる。

Roy H. Copperud は *American Usage and Style: The Consensus*, p. 61 に “cannot but and the more usual cannot help but have been widely criticized on the ground that they contain a double negative (but plus not). Grammar books once were unanimous that cannot (help) but was objectionable.” と歴史的経緯を述べて、かつては非難され容認されなかった語法であったが、現在はいずれも正しい口語英語であると容認され、“respectable usage” の評価を

得ていると述べている。

同様な見解として、William Morris and Mary Morris も *Harper Dictionary of Contemporary Usages*, p. 106 で、Formulations such as “I *can't help but* wonder why” should not be used in Formal speech or writing. Make it “I cannot help wondering why” or “I wonder why.” *Can't help but* is a double negative. であると主張している。即ち、“can't help but” は二重否定の構文であるところから容認できないと主張している。しかし、アメリカの現代英語では口語として、一般的にいずれも標準語法だとして容認されている。従って、この三とおりのパターンについての分類で、容認、非容認をめぐって時代の推移や言語変化を看破した Perrin の下した下記の文法判断は、現代英語の基準からいって先ず妥当なところかと思われる。

Formal: I *cannot but feel* sorry for him..

General: I *can't help feeling* sorry for him.

General: I *can't help but feel* sorry for him.

上記の Perrin の説をふまえて、英米の文学作品から使用例を挙げて検証してみることにする。

## 2-2 can't help do の例

He clears his throat and spots over the side; I don't like to see that but I *can't help watch*.

— Joce Carol Oates, *Four Summers*.

## 2-3 can't but do の例

Hester *could not but ask* herself whether there had not originally been a defect of truth, courage, and loyalty on her own part, in allowing the minister to be thrown into a position where so much evil was to be foreboded and nothing auspicious to be hoped.

— Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*.

## 2-4 can't but help do の例

... I *could not but help begin* to wonder if the ownership of me did not presage a diminution ...

— William Styron, *The Confession of Nat Turner*.

## 2-5 can't help but do の例

He finished his drink. "That's the story. You asked for it, remember. I *can't help but look at* them. I *can't help but want* them."

— Irwin Shaw, *The Girl's in their Summer Dresses*.

この語法について、Theodore M. Bernstein は *The Careful Writer*, p. 85 に、Some grammarians have been critical of the use of but as it appears in this sentence: "Dr. Andenaur will not be at the summit conference, a fact that cannot help but wound his pride." They contend that it is "crude and unidiomatic English" and argue for making it "... cannot help wounding his pride." Whether or not the but construction was "crude and unidiomatic" at one time, it is usual and acceptable today. A point to notice, however, is that this use of but is inherently negative, so that to follow it with another negative is to pervert the meaning, as in "Who knows but that five years from now the Soviet bloc may not collapse?" Delete the "not." と、詳しい経緯を述べているが、かつては非文法的だとして激しく非難され、認められなかった語法ではあるが、現在では概ね上記の Perrin の説同様に一般に容認されている。そこで、現在のこの語法の現状を英米の文学作品から使用例を挙げて見てみることにする。

... ; but in the act of hiding his self-hate, he *could not help but hate* those who evoked his self-hate in him. So each part of his day would be consumed in a war with himself, a good part of his energy would be spent in keeping control of his enruly emotions, emotions which he had not wished to have, but could not help having.

— Richard Wright, *The Man Who Went to Chicago*.

But certain customers of the cafe who came in every day *could not help but see* how the girls asked him to buy them this and that, and how he always gave in with a nature too good to be decently true, and without the least sign of realizing what was really happening.

— Alan Sillitoe, *Uncle Ernest*.

Jack was looking straight ahead, but Norman *could not help but glance at* the boys—absolutely ordinary faces with identical blank, cautious expressions, their hair much too long.

— Joyce Carol Oates, *Norman and the Killer*.

Whenever she looked at Joy this way, she *could not help but feel* that it would have been better if the child had not taken the Ph.D.

— Flannery O'Connor, *Good Country People*.

I *could not help but ask*, I had no hope of an answer, having always known that there is

no answer, but it seemed to me that this woman would at least understand the terms of my question. — Margaret Drabble, *The Millstone*.

I was walking fast to keep ahead of him, I *couldn't help but giggle*, I was so embarrassed — this man in a white shirt was really walking out on the highway, he was really going to leave his car parked like that! — Joyce Carol Oates, *Small Avalanches*.

Because I was at my window so much I *could not help but see* nearly everything that happened to him. — Carson McCullers, *Court in the West Eighties*.

So may-be all the earth looked flat while you were falling toward it or maybe you couldn't bear to look or maybe you *couldn't help but look*. — William Faulkner, *Snow*.

Yet he *could not help but contrast* the diligence of the boy, who was a peddler's son, with Miriam's unconcern for an education.

— Bernard Malamud, *The First Seven Years*.

The whole town of Dover began to throb in the wood and tin, like an old tired heart, when the men walked through once more, coming around again and going down the street carrying the fish, so drenched, exhausted, and muddy that *no one could help but admire* them. — Eudora Welty, *The Wide Net*.

上記の引用例からわかるように、“can't help～, can't but～, can't but help～”のパターンよりも、“can't help but～”の形式のほうが圧倒的に popular であることがわかる。取り分け後者は例の多さからいってもほぼ社会的に容認された所謂“established form”であるとみなすことが出来る。

### 3. different～than ; different than～ ; differently than～ ; different ～ to (= different ～from ; different from ; differently from 「～と違う, ～と異なる」)

アメリカ英語では、“different”の後に前置詞“from”を取るのが最も一般的な用法であるのに対して、イギリス英語では“to”を取ると、Porter G. Perrinの *Writer's Guide to Index*, p. 578 は述べている。しかし、意味が似通っている“other than”と混同して、話し言葉では“different”の持っている比較の概念から“different than”という表現用法がよく使用されることがある。これについて、Sheridan Bakerは *The Complete Stylist*, p. 301 に、“Never use the phrase. Things differ *from* each other. Only in comparing differences could *than* be used: All three of his copies differ from the original, but his last one is *more* different *than* the others. But here *than* is controlled by *more*, not by *different*.”と説明している。この“than”を前置詞の代わりに用いるのは、特に“different”と“than”の間に他の語が入

った時が多いようである。これについて Perrin は *Writer's Guide to Index*, p. 578 に “*Different than* is especially common when the object is a clause.” と述べている。また William and Mary Morris も *Harper Dictionary of Contemporary Usage*, p. 184 に “The more common American idiom is *different from* but, as several leading grammarians have pointed out, the use of *different than* is becoming increasingly more popular among careful writers when the object of the preposition is a clause, as in ‘Please inform us if your address is *different than* it was in the past.’” と例を挙げて説明している。

Theodore M. Bernstein の *Dos, Don't & Maybes of English Usages*, p. 62 には “different; ... Most often *different than* is improper ... Stick to *different from* unless there is an exceptionally good reason to depart from it.” と述べている。かつては学者により賛否両論が渦巻いていて、現在でも “different than” は避けるべきであるとしている学者もいるが、“different to や different from” にひけをとらずによく用いられているのが今日一般的なアメリカの言語事情であるように思う。従って、Margaret M. Bryant は *Current American Usage*, p. 69 に、アメリカ英語では “different to” はまれで、“different from” は正式な書き言葉では普通、“different than” は標準語法だとして、次のように述べている。“Evidence shows that *different to* is rare in American English, that *different from* generally occurs in formal written English, that *different than* also occurs in standard usage.” 最後に個別的に使用例を挙げて各用法を見てみることにする。

### 3-1 different ~ than

“Alice in wonderland.” Dad exclaimed. “You mean kids really like that? They must be raising *different* kids of kids *than* when I was a boy. I never could get into it, myself.”

— Frank B. Gikbreth, *Cheaper by the Dozen*.

Mr. Cattanzara was a *different* type *than* those in the neighborhood. He asked *different* questions *than* the others when he met you, and he seemed to know what went on all the newspapers.

— Bernard Malamud, *A Summer's Reading*.

It's a *different* psychological type completely *than* your dad.

— Saul Bellow, *Seize the Day*.

### 3-2 different than ~

Swedes are no *different than* Finns. — Erskine Caldwell, *Country Full of Swedes*.

The room was somehow *different than* it had been a moment before.

— John Steinbeck, *The Long Valley*.

If you believed that, you'd be the kind who'd believe a sweating Baptist smells *different than* a Methodist. — Erskine Caldwell, *In Search of Bisco*.

The Japanese school child must also be disturbed by evidence around him of the distance between ideal and fact, but for him the evidence must be *different than* for the American child. — Edward Seidensticker, *Japanese and Americans*.

### 3-3 differently than ~

“Well, do Catholic kids spell *differently than* other kids?” — Tom Buck, *But Daddy*.

“... And Darry, you ought to try to understand him more, and quit bugging him about every little mistake he makes. He feels thing *differently than* you do.”

— S. E. Hinton, *The Outsiders*.

### 3-4 different to ~

Mrs. Pearce says your going to give me some to wear in bed at night *different to* what I wear in the daytime; but it do seem a waste of money when you could get something to shew. — Bernard Shaw, *Pygmalion*.

Quite quite *different to* the girl of the morning. — Katherine Mansfield, *Brave Love*.

Mrs Pearce says you are going to give me some to wear in bed at night *different to* what I wear in the daytime, but it do seem a waste of money when you could get something to shew. — *Ibid.*

尚, “different to” は “different from” と “opposed to” が混淆したものである。

## 4. 直接話法と間接話法の混淆

この混淆は Otto Jespersen が *Philosophy of Grammar*, 190-2 でいう描出話法 (Represented Speech) のことで、直接話法と間接話法とが混淆して出来たもので、直接話法と間接話法との中間的性質を持つ話法である。井上義昌編『詳解英文法辞典』1087ページに、「話法は直接話法と間接話法に一応はっきり区別され、直接話法を間接話法に変えることは、すべて規範的に行われるように考えられるが、ここに述べる描出話法というのは、いわば直接話法と間接話法の中間の形態で、文の形は直接話法のように独立の形態をとりながら、人称や時制は伝達者、即ち、その文の著者の立場から書かれ、一見、著者の言葉のように見えながら、実は作中人物の言葉や考えを代表して描き出している。」と詳しく述べられていて、



次のような例を挙げている。

Silas knew that little Eppie's toddling legs were giving him much trouble. *But should he try to stop her? He tied her to the leg of his loom. Was that not enough? No, he couldn't punish her.*

また今、これを純粹の直接話法として書き換えてみればその関係がよくわかると述べている。

"But *should* I try to stop her? I *tie* her to the leg of my loom. *Is* that (or this) not enough? No, I *can't* punish her."

要するに、“I said” や “he thought” などの伝達部がなくなった文を描出話法というのである。

I kept asking myself what had black people done to bring this crazy world upon them?

— Richard Wright, *The Man Who Went to Chicago*.

小西友七『現代英語の文法と背景』138ページに、「描出話法というのは Jespersen の用語だが、……内部的独白と名づける学者もいる。このようなわけでこの話法は小説の心理描写に多く用いられている。作者は心理的に登場人物と自己を同一視して、その人物の言葉、あるいは心理的な動きを、自分自身の体験としてその人物に語らせるという仕組みをとるのである。従って、人により、この手法を意識の流れという人もいる。

また、体験話法という名称のあるのもうなずかれる。直接話法ではあからさま過ぎるし、間接話法ではくすんだ感じが強いといった微妙なニュアンスを表現できるのである。」と述べ、「描出話法が読者を作中の人物の心の中に引き込むその一つの技巧であるから、読む側でも作中の人物に身をおいて一緒に考え、感じることを、言い換えると、作中の人物になり切るぐらいの読みに徹することが必要であろう。」と結論づけている。

ここで、研究社の市川三喜編『英語学辞典』878ページから一例、参考までに描出話法の例を引用しておく。尚、( ) 内の語は本文のイタリックの部分の直接話法に書き換えたものである。

James looked at his daughter-in-law. The unseen glance of his was cold and dubious. Appeal and fear were in it. why *should he* (should I) be worried like this? *It was* (It is) very likely all nonsense; women *were* (are) funny things! They *exaggerated* (exaggerate) so, you *didn't* (don't) know what to believe; and then nobody *told* (tells) *him* (me)

anything, *he had* (I have) to find out everything for *himnself* (myself).

— John Galsworthy, *The Forsyte Saga*.

I then looked through all my pockets, including my raincoat, and finally found a couple of stale letters to reread, one from my wife, telling me how the service at Schrafts eighty-eighth Street had fallen off, and one from my mother-in-law, asking me *to please send her* some cashmere yarn first chance I got away from “camp.”

— J. D. Salinger, *For Esme— With Love and Squalor*.

“Please send me”（間接話法）と “to send her”（直接話法）とが混合した Represented Speech（描出話法）の例である。

*Then they asked, What'll we do?* And the men replied, I don't know.

— John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*.

Pa gathered his temper. “*I jus' wanted to know does anybody own it? Do we got to pay?*”

— *Ibid.*

*We're sorry, said the owner men.* The bank, the fifty-thousand-acre owner, can't responsible.

— *Ibid.*

The squatting tenant men nodded and wondered and drew figures in the dust, and *yes, they knew, God knows.*

— *Ibid.*

## 5. 関係代名詞

I met a man whom(= who)I thought was a lunatic.

—大塚高信『英文法の知識』, 177ページ。

この文は “a man who I thought was a lunatic” と “a man whom I thought to be a lunatic” とが混淆して出来たものである。

## 6. 数と名詞の不一致

“these kind of books” や “those sort of pens” などに見られるように、次に来る名詞や数と一致しない言語現象が既に初期近代英語期（1500-1650）を代表する英国の世界最大の劇作家・詩人の William Shakespeare（1564-1616）の作品の中にも散見される。例を挙げると、

*These kind of knaves* I know, which in this plainnes

Harbor more crafts and more corrupter ends

Than twenty silly ducking observants

That stretch their duties nicely. — William Shakespeare, *King Lear*, II. ii. 107-110.

Know you not, master, to *some kind of men* — Id., *As you Like It*, II. ii. 10.

その外, “sort of” の例として, 市川三喜氏の『英文法研究』, 33ページから一例引用すると,

My friend Will Honeycomb is *one of those sort of men* who are very often absent in conversation. — Joseph Addison, *The Spectator*.

数と名詞の不一致が生じる主な原因の一つは, “kind of” や “sort of” が名詞の前にあるために, 形容詞のように考えられて, 特に口語や俗語・方言では “somewhat, rather” 「ちょっと, 多少, 幾分, やや」の意で使われることが多いことから, 勢い “these” や “those” が “kind of” や “sort of” を飛び越えて次にくる名詞と一致するように考えられたために出来た語法で, “these (those) books” と “this (that) kind of books” の2つの形が混淆して出来た語法であると, 大塚高信氏は『英文法の知識』142ページに述べている。またもう一つには, 特に, 口語や俗語・方言などでは, 一般に “kind of” や “sort of” を “kind o', kind-a, kinder, kinda, kiner, sort o', sorter, sort-a” などと書かれたり, 話されたりしているところから, ややもすれば心理的に, 或いは感覚的に, いきおい名詞の前にある形容詞ととらえられ, 錯覚しているところからきていることが多分にあるように思われるのである。

また, *OED* も “The feeling that *kind of* was equivalent to an adjective qualifying the following subject led to the use of *all, many, other, these, those*, and the like, with a plural verb and pronoun, when the subject was plural, as in *these kind of men have their use*. This is still common colloquially, though considered grammatically incorrect.” と延べ, “What *kind of trees* are those?” の例を引用して, 1382年の初例に始まり数多くの用例を挙げている。

*OED* から2例ばかり引用すると,

These *kind of* barracks . . . are . . . more expensive. 1797.

Such *kind of* Pamphlets work Wonders with the credulous Multitude. 1681.

しかし Margaret Nicholson, *A Dictionary of American English Usage*, p. 303 で, “The correct idiomatic uses are *this kind of tree, all kinds of trees, What kind(s) of tree?*” であって, “What *kind of trees* are those?” は文法的には正しくはないと述べている。また H. W. Fowler は, *A Dictionary of Modern English Usage*, p. 320 に同様な説明をしている。しかし, Porter G. Perrin は, *Writer's Guide & Index to English*, p. 665 に, “But *kind* and *sort* are so

closely associated with the noun they stand before that they seem like modifiers and in speech and informal writing the demonstrative adjectives used with them agree with the principal noun of the construction.”と説明して、次のような例を挙げている。

Those *sort of* ideas in his head and that *sort of* life with his wife.

— A. S. M. Hutchinson, *If Winter Comes*, p. 324.

これに対して、Charles Carpenter Fries は *American English Grammar*, p. 58 に、“*These kind (sort) of, those kind (sort) of* are not matters of Vulgar English.”と述べ、Bergen Evans and Cornelia Evans, *A Dictionary of Contemporary American Usage*, p. 263 に、“The noun following *kind of* may be either singular or plural. We may say *this kind of man is dangerous or this kind of men is dangerous*. Both constructions are formally correct but the second, with a plural noun before a singular verb is not heard in the United States. We may also say *these kind of men are dangerous*. This use of a plural qualifier and a plural verb with singular *kind of* is formally irregular, but it has a long history in literary English. It is used today by educated people and must therefore be recognized as standard English . . . In every case, a following pronoun is singular if the verb is singular and plural if the verb is plural, as in *this kind of tree is nice if you like it and these kind of trees are nice if you like them*.”と詳しく説明している。

更に Otto Jespersen は *Essentials of English Grammar*, p. 202 に、“In the Familiar *these kind of tools, those sort of speeches*, we may look upon *kind* and *sort* as unchanged plurals (不変化複数)”であるから正しい用法であると述べている。ここで文学作品から使用例をいくつか挙げておこう。

“Yes,” replied Job, “but these *sort of* things are not easily counterfeited. . .”

— Charles Dickens, *Pickwick Papers*.

I look at him an’ after I’m past I try to remember ever’thing about him, *kind a’* (= of) clothes an’ shoes an’ hat, an’ how he walked an’ maybe how tall an’ what weight an’ any scars.

— John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*.

ここまで、“*kind of, sort of*”の数と名詞の不一致について、*OED*を初め、内外の多くの代表的な文法家の学説を引用検証してきたが、本稿の結論として次の方々の説でもって、この項をしめくりたいと思う。大塚高信『英語の語法—表現編Ⅱ』, 72ページ及び石橋幸太郎主幹による『英語語法大辞典』, 176-178ページに述べられているように、“*this kind of, this sort of*”の現代標準英語の語法基準は下記のとおりである。

*This kind (sort of) books is (or are) instructive.* 但し “a kind of” の時と違って, “this kind (sort) of” の時は牽引力を内包しているが, “be” 動詞は単複どちらでも良い。また *Books of this kind are instructive.* では, “of this kind” の前の名詞の主語の単複にあわせるというのが正用法であるということが出来る。

## 7. その他の混淆形式

- 1) *The essence of the irony of the plight of the Negro in America, to me, is that he is doomed to live in isolation, while those who condemn him seek the basest goals of any people on the face of the earth.* — Richard Wright, *The Man Who Went to Chicago.*

「どこの国民よりもやさしい目標を求めている」という意味で, “seek the basest goal of all” と “seek baser goals than any other people” の混淆によって生じた, いわば不合理な表現である。勿論, 論理的には決して正しい文ではないが, くだけた口語の会話文ではしばしば耳にすることがある。

*His versification is by far the most perfect of any English poet.*

“The most perfect of all English poets” と “More perfect than that of any other English poet” の混淆で出来た構文である。

- 2) *He brought back two medals, an American medal and a French one, and no man knows till yet how he got them, just what he done.* — William Faulkner, *The Tall Man.*

“till yet” は “till now” と “as yet” が混淆したものである。

- 3) *What did he come here for to teach us his own language or to learn it from us.*  
— James Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man.*

“What did he come here for?” と “Did he come here to teach us his own language or to learn it from us?” という2つの文の混淆で出来上がった表現である。

- 4) *How come you looking at me that way for?*

— Richard Wright, *The Man Who Went to Chicago.*

「どうしてそう私を見るのですか」という意味で, “What did you do that for? (= Why did you do that?)” と “What~for?” が混じって出来た構文である。くだけた口語英語によく見

られる表現である。

- 5) John Henry stared without surprise. *'How did he act like?'* And when she did not answer all at once, he went on: 'Did he crawl on the ground and moan and slobber?'

— Carson McCullers, *The Member of the Wedding*.

“How come (= why)~?” と “what~like?” の文意が混じって出来た構文である。

- 6) He is one of our most *affluent* Trustees, and given large sums of money toward the assylum's support.

— Jean Webster, *Daddy-Long-Legs*.

“affluent 「お金持ちで勢力のある」” は “affluent” (= rich) と “influential” が混淆した表現である。

- 7) What would have happened to you, if you *had have done*?

— P. G. Wodehouse, *The Romance of an Ugly Policeman*.

“had have done” と “would have done” の意が混じって出来た構文の表現である。

- 8) Constable Plimmer did not reply. He *was busy* silently *hating* the milkman. — *Ibid*.

“I am busy” と “I am hating” の意が入り混じって出来た構文である。

- 9) Reporters on Florida newspapers were receiving *between* \$150 to \$200 weekly.

— Roy H. Copperud, *American Usage and Style: The Consensus*.

“between \$150 and \$200” と “from \$150 to \$200” が混じって出来た表現語法である。

## 8. その他の例

以下に George O. Curme の *Syntax* 4 IIc, pp. 10-11 からいくつか統語法の例をあげておく。

- 1) I am *friends with* him.

“We are friends.” と “I am friendly with him.” の混淆によって生じたと説明されている。

- 2) They *each* did *their* best.

“They all did their best.” と “Each of them did his best.” の文意が混じって出来たもの



である。

3) *There is no use your telling me that you are going to be good.*

“There is no use in your telling~” と “It is no use your telling~” が混じって出来た構文である。

4) *The crocuses had hardly come into bloom in the London Parks than they were swooped upon by London children.* — *OED.*

*Hardly had the Council been reported at Trent... than Elizabeth was allying herself with the Huguenots.* — *Ibid.*

“hardly~than”は“no sooner~than”との混淆によって出来たもので、*OED*はこのような語法を非難している。従って、正しくは“hardly~when”或いは“hardly~before”とすべきところであって、この語法はさけるべきであるが、くだけた言い方では時折耳にすることがある。これについて、Margaret M. Bryantも *Current American Usage*, p. 107 に、“*Hardly* also occurs in formal English followed by *when* (or *than*), as in *Hardly had the surface rock been removed when three great beryl masses...*” (*Reader’s Digest*, May, 1957). So does *scarcely*, but in formal English one may find *scarcely... than and hardly... than*, as in, “*Scarcely had the clatter of the carts died away than a carriage raced through...*” (*Ibid.*, September, 1940) と述べている。

この語法について更に、George O. Curme, *Syntax*, pp. 274-275 で次のように歴史的な経緯を交えて、詳しく説明している。

*Than* is now used with temporal force only after *no sooner*; where, however, it is quite natural since it follows a comparative: ‘I had no sooner done it *than* I regretted it.’ As, however, the temporal force here is sometimes felt, the temporal conjunction *when* is sometimes improperly used instead of *than*. After other words of similar meaning but without comparative form, as *scarcely*, *hardly* (both = *no sooner*), *not long*, *not far*, *not half* (an hour, etc.), *not* + verb + object or adverbial phrase, we regularly employ *when* or *before*: ‘I had scarcely done left the house *before* Mrs. Riccabocca rejoined her husband.’ Sometimes *than* is improperly used here instead of *when*: ‘The crocuses had hardly come into bloom in the London Parks *than* (instead of *when*) they were swooped upon by London children.’ In older English, *till* was sometimes used instead of *when* or

*before*: 'I had not been many hours on board *till* (in England now usually *when* or *before*) I was surprised with the firing of muskets' (Defoe, *Voyage round Word*). In the *Oxford Dictionary* this usage is represented as now confined, in England, to dialect, but in America *till* is sometimes still used here alongside of *before* and *when*.

#### 参考文献

- 石橋幸太郎編集主幹 (1965) 『英語語法大事典』大修館書店。  
 —— (1972) 『現代英語学辞典』成美堂。  
 市川三喜 (1954) 『英文法研究』研究社出版。  
 —— (1955) 『英語学辞典』研究社出版。  
 井上義昌 (1967) 『詳解英文法辞典』開拓社。  
 上野明 (1972) 『現代英語の用法』研究社出版。  
 上野景福 (1980) 『英語語彙の研究』研究社出版。  
 大塚高信 (1941) 『英文法の知識』三省堂。  
 —— (1958) 『英文法論考』研究社出版。  
 —— (1970) 『新英文法辞典』三省堂。  
 ——監修 (1975) 『英語の語法—表現編Ⅱ』研究社出版。  
 大塚高信, 中島文雄監修 (1983) 『新英語学辞典』研究社出版。  
 尾上政次 (1957) 『現代米語文法』研究社出版。  
 北原保雄編 (2000) 『日本国語大辞典』第二版 小学館。  
 小西友七 (1977) 『現代英語の文法と背景』研究社出版。  
 —— (1982) 『アメリカ英語の語法』研究社出版。  
 —— (編) (2005) 『現代英語語法事典』研究社出版。  
 佐藤佐市 (1954) 『現代アメリカ口語の研究』篠崎書林。  
 清水護 (1965) 『英文法辞典』倍風館。  
 竹林滋 (2002) 『新英和大辞典』第六版 研究社出版。  
 田中春美 (1987) 『現代言語学辞典』成美堂。  
 新村出編 (2007) 『広辞苑』第六版 岩波書店。  
 堀内克明編 (1999) 『英和中辞典』旺文社。  
 榎井油夫 (1965) 『現代英語教育講座 12』研究社出版。  
 松村明編 (1995) 『大辞林』第二版 三省堂。  
 Albert C. Baugh & Thomas Cable (1993), *A History of the English Language* London: Routledge.  
 Baker, Sheridan (1966), *The Complete Stylist* New York: Thomas Y. Crowell Company.  
 Bernstein, Theodore M. (1965), *The Careful Writer, A Modern Guide to English Usage* New York: Atheneum.  
 —— (1977), *Dos, Don't & Maybes of English Usage* New York: The New York Times Book Co., Inc.  
 Brown, Lesley (1993), *The New Shorter Oxford English Dictionary on Historical Principles (SOD)* Oxford: Clarendon Press.  
 Bryant, Margaret M. (1962), *Current American Usage* New York: Funk & Wagnalls.  
 Burchfield, Robert (1983), *The English Language* London: Oxford University Press. 加藤知己訳『オック

スフォード英語史概論』オックスフォード大学出版局。

- Copperud, Roy H. (1960), *American Usage and Style: The Consensus* New York: Van Nostrand Reinhold Company.
- Curme, George O. (1960), *Syntax* Boston: D. C. Heath And Company.
- Emery, H. G. and K. G. Brewster (1927), *The New Century Dictionary of the English Language* New York: Random House.
- Evans, Bergen and Cornelia Evans (1957), *A Dictionary of Contemporary American Usage* New York: Random House.
- Follet, Wilson (1966), *Modern American Usage* New York: Hill & Wang.
- Fowler, H. W. (1965), *A Dictionary of Modern English Usage* New York and London: Oxford University Press.
- Fowler, H. W. & F. G. Fowler (ed.) (1964), *The Concise Oxford Dictionary of Current English (COD)* Oxford: Oxford University Press.
- (ed.) (1955), *The Pocket Oxford Dictionary of Current English (POD)* Oxford: At the Clarendon Press.
- Fries, Charles Carpenter (1940), *American English Grammar* New York: Appleton-Century-Crofts, Inc.
- Funk, Isaac K. ed. (1913), *New Standard Dictionary of The English Language* New York: Funk & Wagnalls Company.
- Gove, P. B. (1961), *Third New International Dictionary of the English Language, Unabridged* Springfield, Massachusetts: G. & C. Merriam Co.
- Harrison, G. B. (1952), *Shakespeare the Complete Works* New York: Harcourt, Brace & World, Inc.
- Jespersen, Otto (1909), *A Modern English Grammar* London: Braford & Dickens.
- (1924), *The philosophy of Grammar* London: George Allen & Unwin Ltd.
- (1957), *Essentials of English Grammar* London: George Allen & Unwin Ltd.
- (1894), *Progress in Language* London: Sonnenschein.
- Marckwardt, Albert H. revised by J. L. Dillard (1980), *American English* New York: Oxford University.
- Mcintosh, E. (1950), *The Concise Oxford Dictionary* Fourth Edition (COD) Oxford: At the Clarendon Press.
- McKechnie, Jean L. (1958), *Webster's New Twentieth Century Dictionary of the English Language, Unabridged Second Edition* New York: The World Publishing Company.
- Mencken, H. L. (1936), *The American Language* New York: Alfred A. Knopf.
- (1945), *The American Language: Supplement One* New York: Alfred A. Knopf.
- (1948), *The American Language: Supplement Two* New York: Alfred A. Knopf.
- Morris, William and Marry Morris (1817), *Harper Dictionary of Contemporary Usage* New York: Harper & Row, Publishers.
- Murray, James A. and Others (1933), *The Oxford English Dictionary* Oxford: The Clarendon Press.
- Neilson, William Qallen (1951), *Webster's New International Dictionary of the English Language*, Second Edition, Unabridged Springfield, Mass., G. & C. Merriam Company.
- Nichols, Wendalyn R. (2001), *Random House Webster's Unabridged Dictionary* Second Edition New York: Random House.
- Nicholson, Margaret (1957), *A Dictionary of American English Usage* New York: Oxford Press.
- Perrin, Porter G. (1965), *Writer's Guide And Index to English* Chicago: Scott, Foresman And Company.

- Robertson, Stuart revised by Frederic G. Cassidy (1954), *The Development of Modern English*, Second Edition New Jersey: Prentice-Hall, Inc.
- Schur, Norman W. (1980), *English English* Essex, Connecticut: A Verbatim Book.
- Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner (1989), *The Oxford English Dictionary* Second Edition Oxford: The Clarendon Press.
- Stein, Jess (1966), *The Random House Dictionary of the English Language* The Unabridged Edition New York: Random House.
- Sweet, Henry (1968), *New English Grammar* Part I, Oxford: The Clarendon Press.
- Wyld, Henry Cecil (1952), *The Universal Dictionary of the English Language* London: Routledge & Kegan Paul Ltd.